

議論へと発展した。「今後の天皇制について国民一人ひとりが考え続けなければならない」というのが一種の結論であった。

今回の日文研・歴史館共催の特別公開シンポジウムはかなり盛況であった。参加者アンケートからも、テーマは十分に魅力的であり、登壇した先生方の発表も大いに興味を持たれたことが読み取れる。土曜日の開催もよかった。筆者が実行委員長として特に嬉しいのは、「今回初めて日文研の行事に参加した」という方々が多数いたことである。学生も多かった。歴史館の広報活動も功を奏しただろう。アンケートの自由記述部分を見れば、特別公開シンポジウムの中身に関しては積極的なレスポンスが圧倒的に多く、発表者は十分な知的刺激を参加者に与えたであろうことがうかがえる。

反省すべき点がないわけではない。筆者が実行委員長兼発表者として感じたのは、時間的な余裕のなさである。第二部では発表時間が発表者一人につき一七分しかなく、座談会も十分な時間が取れず、発表者はそれぞれ一回の発言だけで終わってしまった。アンケートでも、「時間が足りない」、「消化不良気味」、「一日のイベントにすぎなかった」などという意見が多くあった。音響的に多少の問題もあり、「声が反響してよく聞き取れなかった」、「上手く聞き取れない」、「音響

が悪い」など不満の声があったことも事実である。

以上のような問題点があったとはいえ、今回の日文研・歴史館共催の特別公開シンポジウムは、有意義で、収穫の多いものであったことに変わりはない。二〇二一年から従来通りの一般公開を秋に開催する予定であるが、いずれまた歴史館の皆さんと手を組んでイベントを催したいと思う次第である。

(国際日本文化研究センター教授)

共同研究「植民地帝国日本における知と権力」あとがきのあとがき

松田利彦

先頃、国際日本文化研究センターでの共同研究「植民地帝国日本における知と権力」(二〇一三〜一六年度)を終えた。この共同研究については、共同研究委員会に共同研究終了報告書を提出し、成果報告書『植民地帝国日本における知と権力』を編み、かつ、成果報告書を刊行してくださった思文閣出版の出している『鴨東通信』(二〇一九年四月号)には小

文を載せていただいた。それに重ねての今回の執筆である。「あとがきのあとがき」というタイトルは、屋上屋を架した文であることを重々承知の上でのものである。

準備会・取りまとめ・国際研究集会を含めると五年間にわたったこの共同研究では、日本の台湾・朝鮮・「満洲国」などに対する支配において、学問的知識・政策構想・イデオロギー・スローガンなど多様な形をとって現れた「知」に着目しつつ、それが帝国の支配に果たした役割や、植民地支配下における被支配者の「知」のあり方を考察してきた。具体的には、知識人の学術活動と政策、政策担当者の思想・対抗知といったことが多くの班員に共通する問題関心となった。

植民地権力と被支配民族にまたがるこのような広い意味での「知」が植民地統治を規定した、という枠組みから本共同研究は出発した。そこには、従来の日帝の学知研究が、ややもすれば、日本人の構築した知のみを考察対象に限定する傾向があったことへの批判をこめている。本共同研究は、単に日本本国の知の影響が植民地にいかにか波及したかという問題ばかりでなく、むしろ日本本国の知がどのような植民地現地の知と向き合い競合・包摂し合わなければならなかったかという問題にも注意を向けた。さらに、日本のアジア各地

域に対する植民地統治の時期を孤立的に論ずるのでなく、その前後、特にポストコロニアルな文脈の中で捉えることも重視した。解放・光復前後の知の継承／断絶は本研究の大きなテーマの一つとなった。

さて、延べ一〇〇本を超える報告を得た共同研究を終え、いささかの疲労感を覚えている（徒労感ではない、念のため）。この共同研究は、所長裁量経費による「国際共同研究」のパイロットケースとしてはじめられたため非常に緊張感があった。韓国・台湾から毎回多くの研究者を呼び、たいいてい朝から晩まで二日間にはわたり議論し続け、しまいには日本語と韓国語とマンダリンが飛び交うこともしばしばだった。また、二、三、四年目にそれぞれ韓国（翰林大学校）・台湾（中央研究院台湾史研究所）・日本（日文研、国際研究集会）で連続シンポジウムを開催している。すでに五〇代に入り体力も落ちはじめていた私には、なかなかのハードワークではあった。

この共同研究は、また、ちょうど日文研の財政逼迫があらわになる直前の時期に当たっていた。まだ多少なりとも豊かだった財政を背景に、このような研究者としての好き勝手な許されたのだと思う。逆に、この共同研究会と同じ規模の研

研究会を催すことは、財政の現状ではまず無理ではないだろうか。その意味では、パイロットケースとしての役割は果たせなかったといわざるをえないのだろう。私のせいではないと思うが。

さて、日文研の同僚諸賢は、私の共同研究の回顧にどのような内容を期待されているのだろうか。こんなに頑張りましたという自慢だろうか。あるいはこんなことをやらかしましたという失敗談もしくは反省の弁なのだろうか。あるいは（私の



写真1 (中央研究院台灣史研究所におけるワークショップ、2015年10月)



写真2 (翰林大学校におけるシンポジウム、2016年6月)

もっとも得意とする)愚痴だらうか。あるいは案外何も期待していないかもしれない。いずれにせよ一応すべて書き留めておくことにしよう。

自慢の方から書かせていただく。本誌『日文研』での執筆依頼を頂戴したのと同じ頃、共同研究に対する外部評価がメールで届いた。Sだった。率直に言えば、喜びよりは過分な評価に恐懼する気持ちの方が先に立った(Sを取り消して欲しいと申し立てているわけではない、念のため)。特に評価していたのが、成果報告書(松田編『植民地帝国日本における知と権力』)の冒頭に、序文・解説(収録論文の梗概)・研究動向を付し全体を俯瞰できる構成としたところだったように思う。しかし、個人的には、この冒頭、とりわけ研究動向論文こそが共同研究を振り返ったとき最も心残りな部分だった。

ここからは反省談になる。たしかに、研究動向論文——最終的には「植民地期朝鮮における「知と権力」をめぐる研究の現況と課題」というタイトルになった——は、執筆に多いに苦勞した。「知」「権力」というキーワードで植民地朝鮮に関わる先行研究群を整理しようとしても、対象が広すぎてどのようにまとめたらいかがさっぱりイメージがわかなかった

のである。共同研究主宰者であれば誰しも経験があると思うが、狭すぎるテーマを掲げると人が集まらないし、広すぎるテーマではじめると風呂敷をたたむのに苦勞する。

成果報告書は植民地期の朝鮮・台湾とその解放後にまたがるが、研究動向論文の朝鮮版は私が書き、台湾版は畏友・陳延煖さん(中央研究院台湾史研究所)に執筆していただくことにした。陳さんからは、どのような枠組みの論文を求めているのか分からない、見本を見せて欲しいとたびたび催促を受けた。結局、「知と権力」という側面から見た植民地期朝鮮史の概説」という論文を書くつもりでまず大枠を書き、ここに関連文献はめこんでいくという方法にたどりつくまで一年以上を要した。これからこの分野を研究しようとする初学者にとっては、それなりに役立つガイドにはなっただろう。しかし本来、この作業は、共同研究を開始するときにはすませておくべきものだったと思っている。共同研究会の初めに、班員を前に、主宰者は自分の掲げたテーマが何を目指し、それがどのような学問的系譜の継承あるいは批判として位置づけることができるのか、そのような道筋を語る事が理想だと考えている。私は、これまで三本の共同研究を主宰してきたが、研究会の初頭にきちんとこのようなことができ

たのは最初の共同研究（「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚」二〇〇四～二〇〇六年度）だけだったと自己採点している。その後の共同研究は、むしろ共同研究をしながらその分野について学んでいくという自転車操業になってしまったように思う。それはそれで自分の視野を広げる意味があったが、他方で過去の自分の業績を超えられないところに自分の老いを感じずにはいられない。

話は少し飛躍する。ここからは愚痴である。ここまでの部分を読まれた方のなかには、この共同研究にたずさわった五年間は、さぞかし研究に耽溺しえた期間だっただろうと受けとる向きもあるかもしれない。しかし実のところ、少なくとも主観的にはそうではなかった。共同研究が始まってまもなく私は大学院（総研大国際日本研究専攻）の専攻長に二年間任じられ、その後さらに二年間、機能強化担当調整主幹となり、都合四年間、日文研執行部の末席を占めた。特に調整主幹時代の「国際日本研究」コンソーシムの立ち上げは、片手間のできるような仕事ではなかった。一年間に一篇の論文も書けなかったことはいつぞやの木曜セミナーでお話したとおりである。ここで私の言葉で本音を書くことはおそらく立場上いろいろとまづいで、最近の研究で目にした資料の一

節に代弁していただく。

筆者の田中正四は京城帝国大学（植民地期朝鮮における唯一の官立大学）医学部衛生学予防医学教室の助教授で、日本敗戦前後における植民地朝鮮の様子を克明に日記に残している。以下、一九四五年七月一日の日記よりの引用（田中正四『瘦骨先生紙屑帳』一九六一年）。

学校の教員というものは「中略」非常に忙がしい。それにも拘わらず勤労奉仕を買って出て、なれない仕事をやって奔命に疲れている。そのあとを埋めるために、まだ一人前になっていない師範学校の生徒を動員する。そしてお互いに何か忙がしいような、人一倍働いたような錯覚を起こして僅かに自分を慰めている。「中略」

日本人植民者であり高等教育機関の教員でもあり、それゆえ客観的には特権的身分だった田中に我が身を重ねてしまう自分について苦笑してしまう。しかし、妙に人ごととは思われない感覚に満ちた文章でもある。ある意味、現代の大学改革の時代は戦争の時代なのだろうか。

（国際日本文化研究センター教授）